

こだわりのスチールシャフト 誠意、熱意、創意の50年

日本シャフト株式会社代表取締役副社長 増成 治保氏

—— 日本シャフトさんの、軽量スチールシャフトがゴルフアーの間ですっかり定着しましたね。

増成 N・S・PRO950GHです。発売から11年が経ち、お陰様で総出荷数も3000万本にせまってきました。スチールシャフトといえば、まだ一般的にカーボンシャフトと比べると改良の余地は少なく、新製品の開発という面では苦勞しますが、軽量スチールのNo.1としてご愛顧頂いております。

—— スチールシャフトは「重い、飛ばない」というイメージがありましたが、振りやすい上に軽く、抜群のフィーリングと方向性の良さが特徴と伺いましたが。

増成 なにより左右前後のバラつきがなく振りやすいんですね。当然スコアにも影響します。私もかつてはカーボンを使っていましたがスチールに変え、そのままスチールです。

—— ところで増成副社長のスタートはやはりニッパツですか。

増成 そうです。学校を出てニッパツに入社、浜松支店長をつとめました。2001年、タイニッパツ副社長として4年間、タイで勤務しました。自然も多く、環境的にはいいと

ころでしたね。2006年に日本シャフトの常務、今年副社長に就任しました。

—— ニッパツは以前「日本発条」でした。日本シャフトさんの創業はいつですか。

増成 昭和34年です。日本ではじめてゴルフのワールドカップが開かれた。第一次ゴルフブームで湧いたころでした。親会社がバネの会社ということで「ゴルフのシャフトも基本はバネだろう」というのが当時のトップの判断でした。ゴルフのシャフトも原理は同じだろう、でした。

—— 最初は、ご苦勞があったと思うのですが。

増成 そうですね。ニッパツからシャフトづくりを命じられたのが松田初代社長でした。確かにシャフトはバネですが、バネにはステップをつける加工がないんです。試行錯誤の連続だったと聞いています。

—— 増成副社長がシャフトに來られた時はすでにスチールシャフトが定着したころでしたか。

増成 99年に950GHを発売し、「軽量スチール」という新ジャンルが市場に定着しつつある頃でした。しかしスチールは重い、飛ばないイ

メージがまだ残っている時代でした。

—— スチールシャフトの軽量化に取り組まれたのはいつごろですか。

増成 いまから10数年前です。それまでスチールシャフトの重量は120〜128gでしたが、30gほど軽量化に成功したんです。日本人の体型に合ったシャフトを——当時池田社長はじめ、技術連は懸命に取り組みました。シャフトの外径を肉薄にして軽くしたんですが、逆に強度に問題が生じ、新しい合金材づくりを材料メーカーに依頼するなど、大変でした。しかし、スチールは凋落の傾向で、製造中止の憂き目にも遭いました。

—— 全体を軽くすれば、当然強度が問題になりますね。

増成 アルミシャフトも考えましたが、製造技術の未熟さも重なり、これは失敗でした。

—— N・S・PRO950GHが出来上がった経緯を

増成 もともとヘッドスピードの遅いアマチュア向けに設計したんです。素材も、改めて新合金の製造を依頼プロに試作品を使ってもらいました。それがとても評判がよかったです。タメを作って打つタイプにはタメを



つくりやすく、ヘッドスピードの遅い人にはインパクトで勝手にヘッドが走ってくれるんです。つまり、1本のシャフトがあらゆるスイングタイプに対応する「ブローキックポイント設計」がカギでした。そこがN・S・PRO950GHの秘密です。

—— 理想のシャフトといえますね

増成 このシャフトは最新の技術開発で軽量化に成功しただけではなく、オリジナルの設計手法を取り入れているんです。1本のシャフトでスイング中にキックポイントが移動すると考えていただけありがたいでしょう。シャフトには「先調子」「中調子」「手元調子」と3種のキックポイントがあり、それぞれのスイングタイプに応

じてシャフトを選びますね。ところが往々にして違うタイプのシャフトを使うケースが多く、それでフィーリングやスイングに違和感が生じ、ミスの原因になるんです。しかし、1本でそのどれをも解決すれば合わないシャフトを使う心配がなくなります。

—— 不可能を可能にしたのですね

増成 スイング中にシャフトの手元から、先にキックポイントが移動すれば、どのタイプにも応用するでしょう。

—— スチールは、合わないという先入観を持つ人がいるようですが。

増成 スチールを知らなかった人が使いはじめているのも確かです。ゴルフの醍醐味を体で味わえるのはス

チールシャフトだといわれています。しかし、シャフトの進化は終わったわけではありません。ゴルフシャフトの総合的な開発は続けていく必要があると思っています。海外のクラブメーカーもいまだにN・S・PRO950GHを採用しています。

—— 大変な需要と伺いましたが生産態勢は？

増成 こんな不況時にうれしい悲鳴ですが、態勢は万全です。会社の利益も大切ですが、それより少しでもいいものをつくってゴルファーのみなさんに喜んでいただければそれが日本シャフトの精神です。その気持ちが大勢のかたの支持を得ている最大の原因と自負しています。

1947年兵庫県生まれ。甲南大学経営学部卒、1969年日本発条株式会社入社。
1996年同社浜松支店長、1985年タイニッパツ副社長、2005年日本シャフト株式会社常務取締役、2006年同社専務取締役、2010年同社代表取締役副社長。

—— 技術の粋を結集したシャフトづくりというわけですね。ところでいま、企業の環境問題への取り組みがさかんに言われていますが。

増成 目的、目標を定め、取り組んでいます。たとえば省資源の推進、地球資源の有効活用、そして地球温暖化防止活動の推進、廃棄物による環境負荷の低減、有害物質による環境負荷の低減、製品設計・生産・廃棄にいたるまで全ての段階を通じて環境に取り組み。以上のことを全社員に周知徹底しています。本社・横浜工場・駒ヶ根工場の全部門で環境の国際規格ISO14001に合わせたマネジメントを構築し、お客さまの満足度に応じるべく努力しています。

—— 最後に日本シャフトさんの抱負を。

増成 50余年の歴史はユーザーの方々のニーズに応えるため商品開発に全力を注ぎ、さらに一步先の自社独自開発の商品提案をして参ります。商品開発は素材開発から人間工学まで、自動化から品質管理まで徹底した取り組みを実施しています。「誠意」「熱意」「創意」の社訓にそって社会と融合、貢献していく所存です。